



巻頭言

東京理科大学名誉教授 久保寺 昭子

もう一つの責務

日々、厳しい口調で伝えられるニュースはいろいろとあるものの、わが国は平穏で、モノが豊かにあふれている国だとつくづく思う。この平和の根幹に、しっかりとしたエネルギーの供給と、様々な放射線利用の成果があることを人々は忘れてしまっていないだろうか。

今日、われわれの日常生活の衣・食・住の中には、放射線によってもたらされた生活文化が、数え切れないほど定着している。にもかかわらず、これらの事実は、残念ながら、一般の人々には、まったくと言ってよいほど認識されていない。目に見えない放射線、だからというわけではないが、多くの場合黒子で、縁の下の力持的役割であることも事実である。

「放射線」という言葉が表に出ると、急に冷やかで、懐疑的な視線が走る。日ごろの恩恵など知らぬとばかりに忌避的な行動をとる。自然科学における正しい評価や実績は、多くの場合かえり見られることもなく片隅に押しやられ、政治やイデオロギーの世界で論議され、社会的な尺度によって語られてしまう。時として、自然科学者は、肩身の狭い思いすら味わう羽目になることもある。

社会一般の人々が、原子力や放射線のことを知る窓口は報道であり、そこで伝えられる情報は、短絡的にそのまま受け止められてしまう傾向がある。原子力・放射線の正しい知識の普及活動として、いわゆる原子力 PA 活動なるものが行われ、過去長い時間、膨大な経費と労力が費やされてきているにもかかわらず、今日のこの状況である。これまでの方策が、必ずしも的を得たものとは考えがたい。このような現状のまま、現在、公衆特に母親層に、頑ななまでに根強く腰をすえてしまった「放射線拒否」の考えが、そのまま社会の通念として、固定化されてしまったとしたら、次の世代を担う人々は、原子力・放射線を正しく利用する英知を放棄する時代を迎えて、苦悩しかねない。

五感に捉えることの出来ない放射線の一般の人への教育は、非常に難しいと言える。今後も、放射線の活躍の場は限りなく大きいと考える。この宝を大切に次の世代に正しく伝えていくためには、利用する一人ひとりの心の中に、放射線の安全文化を醸成していくための、しっかりとした知識と技術と誠実さに対する認識が再認識されなければならない「時」でもあると考えている。原子力・放射線の正しい知識の普及は、なまやさしいものではない。

一般の人々への放射線の正しい知識の普及と理解を深め広めていくことは、放射線の専門家たちに委ねられた、もう一つの社会的責務なのかもしれない。

